

ロアルド・ダールと言葉の意識

Roald Dahl and his Wording

奥 西 洋 子

Polonius. What do you read, my lord?

Hamlet. Words, words, words.

アイルランドの劇作家、サミュエル・ベケット (Samuel Beckett) は小説や戯曲を書くにあたって、まず、外国語であるフランス語で完成し、その後、英語に書き換えた。言葉をより意識できるからであろう。¹⁾ もっとも、ベケットにとって本当の自国語はゲール語である筈で、英語を母国語としてどこまで意識したか多少の疑念もあり、ことは複雑である。ロアルド・ダール (Roald Dahl) はウェールズに生まれ、ウェールズとイングランドで教育を受けた英国人であるが、両親共にノールウェー出身であった。父方、母方の祖父母と多数の親族がノールウェーにあって、ロアルドは毎年、夏休みとクリスマスにノールウェーで過ごし、ノールウェー語も不自由なく操れるバイリンガルだった。ダールが非常に強く言葉を意識するのは、二つの言語を常に対比し、吸収した幼児期の成育にその発端があるのではないかと思う。ここで、主要な七編の児童文学作品に彼の言葉の意識がどう表れているかを、いくつかの方面から探してみたい。児童文学に限ったのは、彼の言葉が子供の読者に大きな影響を与えていると思うからである。

1

ロアルド・ダールの作品の中で、まず目立つ言葉の使い方は、言葉の繰り返しと、そのヴァリエーションであろう。その一例、

I stood still---listening, listening, listening...²⁾

これは、ごく素朴な繰り返しにすぎないが、それでも深夜の森で行方の知れない父親を必死で探す少年の途な気持ちが十分に表れていて、それなりの効果はある。が、ダールらしい表現は言葉のヴァリエーションである。例えば、*Matilda* における荒々しい教師のしゃべり方は、shout, bark, cry, snap³⁾ に始まり、boom, bellow (p.89) などの動詞が動員され、その異常な荒々しさを身に沁みて感じ取ることができる。これらの動詞はニュアンスの差こそあれ、激しい口調を表現する言葉である。

けれども作者はここに留まらず、しだいに意味よりも音の類似に惹かれて行くように思われる。*The Witches* から二つ、*James and the Giant Peach* から一例を挙げよう。

...plotting and scheming and churning and burning and whizzing and phizzing.⁴⁾

Sparks fly. Flames leap. Oil boils. Rats howl. Skin shrivels.(*ibid.*,p.9)

...the water came pouring and roaring down upon them, bouncing and smashing and sloshing and slashing and swashing and swirling and surging and whirling and gurgling and gushing and rushing and rushing...⁵⁾

これらの場合、特に最後の例において、作者はおおいに音を楽しんでいると思う。それにしても、無限に流れ出て来るダールの豊富な語彙を見ると、英語という言葉を使ったのは幸運であったと思う。ゲルマン語である英語はノルマン・フレンチと合体することによって語彙が倍増した。その上、ダールは長いアメリカ滞在の間に更に語彙を増やすことができた。

ダールは音に対して非常に敏感である。ベアトリクス・ポターにも同じことがいえる。たとえば次の引用がその良い例である。

Her little black nose went snuffle, snuffle, snuffle, and her eyes went twinkle, twinkle...⁶⁾

ポターの読者は幼児であるため、多くの場合、読み聞かせが中心であろうから音の響きが重要であったと察せられる。

今年、生誕百年を迎えた宮沢賢治は音楽にも関心が深く、そのためか擬音を得意とした。雪沓の音が張りつめた北国の空に「キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、キック、キック、トントントン。」と鋭く鳴り渡る『雪渡り』。風が「どっどど どどうど どどうど どどう」と轟くのは『風の又三郎』である。気候温暖の地に育った者には風がそんな激しい音を立てるとは想像もつかないが、賢治の同郷人によれば、まさにその音なのだという。北国の厳しい自然が持つ透明感や猛々しさを賢治は擬音だけで表現し得たのであった。⁷⁾

ダールの読者は読み聞かせてもらう幼年ではなく、自分で読書を楽しむ年齢になっているが、やはり音の微妙な変化に強く惹かれ、より楽しむことができたであろう。ダールが発明した言葉を真似て遊ぶ読者も多いことだろう。⁸⁾けれども、ダールは読者に迎合するためというよりは、自身が面白くて楽しくて、とまらなくなって言葉遊びに興じてしまったと感じられるところもある。そもそもダールは音合わせが好きで、どの作品にも夥しい頭

韻がひしめいている。

次に、ダールの作品には無数の怒りの表現が見られ、多種多様な罵詈雑言が生き生きと圧倒的な迫力を持って読者に迫ってくる。いずれの国にも罵詈雑言はある筈だが、⁹⁾英国には、この道においてもシェイクスピアという大先輩がいる。次の引用は皇太子ヘンリィ(後のヘンリィ五世)と無頼の騎士、フォルスタフとの悪口合戦である。

Prince. Why, thou clay-brain'd guts, thou knotty-pated fool, thou whoreson, obscene, greasy tallow-catch... This sanguine coward, this bed-presser, this horse-back-breaker, this huge hill of flesh---

Falstaff. 'Sblood, you starveling, you eel-skin, you dried neat's tongue, you bull's pizzle, you stock-fish! O for breath to utter what is like thee! you tailor's yard, you sheath, you bowcase, you vile standing-tuck---¹⁰⁾

痩せぎす長身の王子と超肥満体の老騎士が互いに相手の体型を悪口している場面であるが、この勝負は騎士の勝である。このように下品な言葉にひるまず、豊かな発想のもとに滔々と流れるように出てくる罵詈雑言もシェイクスピアの一面である。

ダールもこの道に熱心である。たとえば、

you blithering little idiot! ...guttersnipes and dandyprats! (*Danny*, pp.98-9)

は小学生に対する先生の雑言である。これには呆然とする。

ストーリー全編に悪口がひしめいている作品は *Matilda* である。この作品は、まず、子供に対する批判で始まる。一般論であるが、子供は blister (p.7), revolting offspring (p.7), wash-out (p.8), grub (p.8), stinkers (p.9), scab (p.10), bunions (p.10), chatterbox (p.11) などと、あまりと言えばあまりにも手厳しい言われ方である。主人公は優れた才能を持つ小学一年生の少女、マティルダであるが、不可解なことに実父は彼女を twit (p.22), squirt (p.26), cheat (p.54), liar (p.55) などと罵り、嫌っている。校長先生トランチブル (Trunchbull) は「子供は私の人生の災いである。」(p.159) と公言してはばからないおかしな人物で、マティルダは更に激しい悪口雑言を受けることになる。a bad lot (p.85), the little brat (p.85), a real wart (p.85), nasty little worm (p.85), a bluebottle (p.86), this little brute (p.86), a gangster (p.87), little cockroach (p.161), little maggot (p.161), a brigand (p.89), a viper (p.89) などと悪意がひしひしと伝わってくる言葉が並んでいる。何故か虫が多いのは生活に根ざした不快感であろうか。

最高の悪口はトランチブル先生からブルース少年に浴びせかけた言葉の洪水であろう。

this clot... this black-head, this foul carbuncle, this poisonous pustule... a disgusting criminal, a denizen of the underworld, a member of the Mafia! ... A thief... A crook! A pirate! A brigand! A rustler!... miserable little gumboil... suppurating little blister (p.120)
... that robber-bandit, that safe-cracker, that highwayman... Bogtrotter (p.121)

このように痛罵されるブルース少年は一体、何をしたかといえば、トランチブル先生が自分用にしまっておいたケーキを一切れ盗んで食べたに過ぎない。子供らしい悪戯が引き起こした猛烈な罵倒にはシェイクスピアも顔負けと言わずばなるまい。あまりのひどさにむしろ笑いを誘う。トランチブル校長は異様な人物であるが、人物としての真実らしさ、面白さではなく、激しい勢いで無限に飛び出す言葉を発するために作られた人物ではないか、という気がする。人物よりも言葉が優先した例がトランチブル校長であると私は思う。それほどダールは言葉が大切なのだ。

2

ダールはまた、言葉の訛りをうまく活用する。彼の作品には、魔女の訛り、巡査部長サムウェイズ (Sergeant Samways) の訛り、巨人の言葉と三種類の訛りがある。

魔女の訛りは次の二つの例、

rrree-moof your vigs! (p.69) [remove your wigs!]

vee vitches... vurrking... with magic (p.81) [we witches... working... with magic]

によってドイツ訛りであることは一目瞭然である。

サムウェイズ訛りは少し複雑になる。

This is a very hinterestin' haccusation, very hinterestin' indeed, because I ain't never 'eard of nobody hen-ticin' a pheasant across six miles of fields and open countryside. 'Ow do you think this hen-ticin' was performed, Mr. 'Azell, if I may hask? (Danny, pp.157-8)

語頭の h が落ちるのはコックニーにもあるが、サムウェイズ氏は h を落とした埋め合わせに、語頭に必要ない h を付け加えて不思議な言葉遣いをする。一見すると滑稽に聞こえる言葉であるが、人々の信頼を集めた巡査部長の威厳のためか、堂々とした物言いと聞こえるのが不思議である。これも言葉の遊びであるが、その意味で秀逸なのは巨人語であり、それは巨人の言葉の誤用が持つ可笑しさである。

The Big Friendly Giant (BFG)は学校へ行かなかったために正しい英語が使えない。彼は

Charles Dickens の小説を繰り返し読み返して英語を独学したということになっているが、彼の言葉は誤用だらけである。たとえば愛読する Charles Dickens は Dahl's Chickens と痛々な間違えられかたをしている。

BFG による言葉の誤用は、いくつかのタイプに分けられる。まず文法的誤用である。be 動詞は、I is, we is, you is, they is, ideas is などと殆どの場合 is が使われ、その結果、たまたま he is, it is など正しい用法となる。have 動詞は、I has, you has, they has と has で統一される。こんなに簡単であればよいのと思うのは外国人ばかりでなく、英語国民の幼児も同じ想いであろう。ダールは子供たちのひそかな願いをここでかなえて見せたのかもしれない。

その他の文法的な誤用は、複数形——micies, girlsies, boysies、動詞の不規則変化——seed [saw]、形容詞——um-possible [impossible], disgusting [disgusting], rotsome [rotten], などである。複数形の間違いは複数語尾を二回重ねたものだが、考えようによっては、いかにも数が多いという感じが強く出るかのような印象もある。不規則動詞の誤用は特に幼児にはよくあることらしい。¹¹⁾ 形容詞語尾も、いかにもありそうな誤用である。こうしてみると、単なる誤用というより、「ああ、同じような間違いをした」と読者が思わず手を打って笑うような誤用であると言ってよからうか。

次に音の近似による誤用が30ばかりある。いくつか挙げると、Whales [Wales], langwitch [language], rotten-wool [cotton-wool], crockadowndillies [crocodiles], chiddlers [childer] その他である。

正しい言葉より誤用の方が優れているように思われる例もある。たとえば kidsnatch は kid を snatch するのだから理屈に合っていて kidnap より感じが出ているように思われる。skin and groans は「骨と皮」で叫んでいるようで skin and bones より生々しく感じられる。disappearing into a thick ear は、シェイクスピアでは into thin air (*Tempest*) なのだが、BFG が巨大な耳を持っていて、少女ソフィーがその中に隠れて旅して来たことを考えると妙に現実感がある。peep your head up good は keep your head up good であるべき所だが、keep しながら peep している二つの意味が表現される。go hide and sneaking は勿論 hide and seek であるが、sneak して隠れる感じが良く出ている。Golden Sovereign! はエリザベス女王への呼びかけで、BFG は懸命に女王に敬意を表しているつもりであるが、ソヴリン金貨を連想させる可笑しさ。このように、秀逸な誤用と呼び得るものが約25項目ほどある。

そのほか、ユーモアを表す誤用も多い。二つだけ例を挙げると、Mrs Sippi and Miss Sour [Mississippi and Missouri], エリザベス女王に挨拶する Your humbug servant は humble servant のつもりだが、humbug にはインチキという意味もあるのでこれも笑える。

感嘆詞も間違っている。rack jobinson [Jack Robinson], save oursolos! [our souls] その他である。

こうして *The Big Friendly Giant* ¹²⁾ は初めから終わりまで言葉遊びに満ち、笑いころげる子供たちの姿が目に見えるようだ。

3

ダールの児童文学は、いずれの作品も夥しい数のシミリーが使われている。「血のように赤い」とか「稲妻のように速い」などの常套語句もあるが、ダールらしいユニークなシミリーが多い。そのうち、ごく少数の例を挙げる。老人の顔は

as brown and wrinkled as a shriveled apple (*Danny*, p.69)

と表現される。リンゴが好きで、しわだらけになった頃のリンゴを美味しいと言うイギリス人にとって身近な表現なのであろう。だから好意的に書かれた老人の顔がリンゴと結びつくのだろう。

意地悪な先生は落ち着きのない犬を連想させる。

snorting and sniffing through his nose like some dog sniffing around a rabbit hole (*Danny*, p.98)

痩せた中年の料理人は、かさかさにしなびている。

a tall shrivelled female who looked as though all of her body-juice had been dried out of her long ago in a hot oven (*Matilda*, p.123)

魔女たちの不快な声は

like a chorus of dentists' s drills all grinding away together (*Witches*, p.79)

と表され、歯科医のドリルの音に対するどうしようもない恐怖が世界共通であることを伺わせて興味深い。

肥った老婦人が、ひと目には

like a great white soggy overboiled cabbage (*James*, p.6)

と見えるのに自分では 'as lovely as a rose' (p.6) と思い込んでいるおかしさ。

意外な比喩は、桃の柔らかく暖かい産毛のはえた皮が二十日鼠と結びついた例である。

これは、やはり少年の発想である。

like a skin of a baby mouse (*James*, p.24)

このようにダールのシミリーは日常生活から選ばれたものばかりである。

単に言葉だけから出るユーモアもいくつかある。たとえば次の例は常套語句と現実のギャップを指摘したものである。

“Supper is a family gathering and no one leaves the table till it’s over!”

“But we’re not at the table,” Matilda said. “We never are. We’re always eating off our knees and watching the telly.” (*Matilda*, p.28)

こうして並べてみると、言葉はやはりその置かれた状況の中で力を発揮するものであり、言葉だけを抜き出すと、面白さは激減してしまうのが残念でならない。

4

先に、巨人語について言及した *The Big Friendly Giant* はダールの児童文学中最高の傑作であると思う。ストーリー展開では *The Witches* と *James and the Giant Peach* に一步ゆずるとしても、言葉の魅力と発想の面白さによって圧倒的な力を持つ。奇抜な発想は常にダールの得意とするところで、夢をつかまえて子供たちの部屋に吹き込んで回る涙もろい優しい巨人の存在を初め、彼の想像力には脱帽である。その中で、まず、ここで取りあげたいのは常識を逆転した発想である。

少女ソフィーはBFGによって常識を覆すいくつかの考えに直面し、そのつど混乱する。最初は泡立ち飲料(froboscottle)についてである。BFGの泡立ち飲料は泡が上から下へさがっていく。それが胃から腸へ泡が下がるに都合合なのである。そして妙なる音楽（とBFGは考えている）と共にオナラ(whizzhopper)として盛大に爆発する。ソフィーは、ゲップならまだ許せるがオナラなど下品で、口に出すのも恥ずかしいことだと頑張ったが、BFGに勧められるままに泡立ち飲料を試して、その結果、自分も爆発を起こしてみると、それが誠に心地よいことだと認めないわけに行かなかった。

次に、ソフィーは人間(human beans)を食べる巨人達の存在を知り、残忍で野蛮だ、巨人に対して何も悪いことをしないのにと怒ったのだが、豚だって人間に何も悪いことはしていない、豚にも同じ言い分があるだろうとBFGから反論を受けると返す言葉がない。巨人も動物も同種族を殺さない、殺し合いは人間だけだ、と指摘されるとソフィーは人間が最も野蛮かも知れないと不安になるのであった。（このあたりは巨人国へ行ったガリヴァーが

人間に絶望するところや、馬の国での人間不信を想わせる。)

その次は素朴な考えである。人間は眠りすぎるので（巨人はあまり眠らないらしい）、眠っている時間を差し引いて年齢を計算すべきだとBFGは言う。8才のソフィーは本当は4才だ。高齢者にはうれしい発想であるが、少しでも年上に見えたい幼いソフィーは4才ではないと泣き出しそうになってしまった。

こうして常識を逆転されて当惑するソフィーを見ると1865年に出版された『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*)¹³⁾が思い出される。言葉遊び、ノンセンス、途方もない発想などキャロルとダールには共通点が多い。*Charlie and the Great Glass Elevator*¹⁴⁾や*James and the Giant Peach*にしばしば現れるノンセンス・ソングも同じである。

なかでもダールは*The Big Friendly Giant*においてキャロルを意識したのではないかと思う。巨人たちが恐れる唯一の人物がジャックだそうだが、これは例の『ジャックと豆の木』がもとになっている。ナーサリー・ライムからハンプティ・ダンプティなどの人物を登場させたキャロルと同じ手法である。しかし、ダールは、どこかまじめに理屈を考えているところがあり、キャロルのような徹底したノンセンスではないと思う。その点ではキャロルの方が自由である。一方、限りなく溢れ出て来る奇抜な発想においてはダールが豊かだと思われる。共にリメリック (limerick) が好きなのは言葉遊びに興じる者として当然であろう。¹⁵⁾

一方、二人のユーモアは、かなり異なっている。キャロルは知性に訴える典型的なイギリス人のユーモアであるが、ダールはもっと荒々しく、日常生活に根ざした、生々しく力強いユーモアである。哄笑を引き出し、その結果、カタルシスを起こさせるユーモアと言えるだろう。これをダールが受け継いだ北欧人の性格だろうと私は想像している。サガの世界との繋がりがあのような気がするのである。

5

ダールは言葉が好きである。前述したように、トランチブル先生を創ったのは hot lava (*Danny*, p.158)のように罵詈雑言を吐かせるためであった。あるいは、二人の少年が魔女の手に落ちてネズミに変えられる不運にあって、ネズミであることの損益を語りあう場面など、言葉の楽しみが強く表れたところである (*Witches*, pp.111-121)。言葉といえば、エリザベス朝の人々も言葉を自在に操るのが面白くてたまらないように見える。それが、しゃれや語呂あわせなどとなって表れる。マラブロピズムもそのひとつである。マラブロピズムは、ある言葉を言うつもりが音の似た別の言葉と間違い、そこから出るおかしさを楽しむものである。¹⁶⁾これをBFG流に言うならば次のようになる。

What I mean and what I say is two different things. (*BFG*, p.49)

少し長くなるがシェイクスピアより素晴らしい例を挙げよう。Mrs. Quickly のセリフである。

I am undone by his going; I warrant you, he's an infinitive[infinite] thing upon my score. Good Master Fang, hold him sure: good Master Snare, let him not 'scape. A' comes continually[continually, incontinently] to Pie-corner—saving your manhoods—to buy a saddle; and he is indited[invited] to dinner to the Lubber's-head in Lumbert street, to Master Smooth's the silk-man: I pray ye, since my exion[action] is entered and my case so openly known to the world, let him be brought in to his answer. (*Henry the Fourth*, Part II, II. i. 25–34)

*BFG*にも多くのマラプロピズムの例がある。ほんの一例に過ぎないが、gigantuous [gigantic], bicerculers [binoculars], telescops [telescopes] (p.166) などである。ただ、殆どの Malaprop 夫人が語の誤りに無関心であるのに対し、BFGは誤用を意識し、悲しんでいる所が違い、笑いの中にかすかに哀感が漂う。彼は言う。

'Words is oh such a twitch-tickling problem to me all my life...I know exactly what words I am wanting to say, but somehow or other they is always getting squiff-squiddled around. (p.53)

そして「正しい話し方」(p.207) は彼が常に苦勞して目標としている重大事である。マラプロピズムは楽しむために導入されたのだが、笑うだけでなく、やがては正しい言葉の用法へとダールは運んで行きたいようである。学校嫌いの彼が学校教育の効用に何度か触れているのもそのためであろう。

言葉は重要である。バイリンガルであったダールは、それを強く意識し、言葉の使い方によって読者の子供たちを楽しませようとした。そして世界中の子供たちから熱烈な支持を得た。彼は現在、子供たちに最もよく読まれている作家のひとりである。その理由は「子供は言葉を食べて成長する」¹⁷⁾ からである。

注

- 1) 正確には「習得した言語の方が、スタイルなしで書くことがやさしいから」とある。
『ベケット戯曲全集Ⅰ』 白水社、1968年。
- 2) Roald Dahl, *Danny, the Champion of the World*, (Puffin Books, 1977) p.59. (以下、*Danny* と略記)
- 3) Roald Dahl, *Matilda*, (Puffin Books, 1989) p.217.
- 4) Roald Dahl, *The Witches*, (Puffin Books, 1985) p.7. (以下、*Witches* と略記)
- 5) Roald Dahl, *James and the Giant Peach* (Puffin Books, 1988) p.102 (以下、*James* と略記)
- 6) Beatrix Potter, *The Tale of Mrs Tiggly-Winkle*, (Frederic Warne, 1986) p.22, p.30.
- 7) 宮沢賢治 『雪渡り』
『風の又三郎』
(『宮沢賢治童話全集』 岩崎書店 1995年)
- 8) Kay Webb(ed.), *I Like This Story*, (Puffin Books, 1987) p.66.
- 9) 『罵詈雑言辞典』が出版されている。奥山益朗編、東京堂出版。
- 10) Shakespeare, *Henry the Fourth*, Part I, II .iv.268 — 274.
- 11) Nina Bawden, *The Runaway Summer*, (Puffin Books, 1972) p.27.
‘We seed you,’ one of the children repeated, and giggled.
‘T’ isn’t seed, it’s sawd,’ said the other.
- 12) Roald Dahl, *The Big Friendly Giant*, (Puffin Books, 1984) (以下、*BFG* と略記)
- 13) Lewis Carroll, *Alice’s Adventures in Wonderland*, first published in 1865.
- 14) Roald Dahl, *Charlie and the Great Glass Elevator*, (Puffin Books, 1986)
- 15) limerickは四行からなるコミカルな詩で一、二、四行が脚韻を踏み、三行がinternal rhyme を踏む。リメリックの名手、エドワード・リア(Edward Lear)から引用する。
There was a Young Lady whose chin,
Resembled the point of a pin;
So she had it made sharp, and purchased a harp,
And played several tunes with her chin.
The Complete Nonsense of Edward Lear, (Faber and Faber, 1979) p.8.
- 16) 劇作家 Sheridan の戯曲 *The Rivals* に登場する Mrs Malaprop が言葉の誤用で有名なので Malapropism と呼ばれる。
- 17) 松居直 「メルヘン世界メッセージ・絵本論」読売新聞夕刊、’95.12.6.